

# 横浜歌人会 会報

## 101\*

横浜歌人会会報第101号

[報告] 第1回文学散歩・即詠歌会 … \* 01

[報告] 2011年度総会&新春歌会 … \* 04

新入会員自己紹介 … \* 07

横浜エッセイ … \* 08

新会員のご紹介/告知板 … \* 08

愉しく、濃密に―文学散歩・即詠歌会を開催

代表委員 千々和久幸

去る四月十九日(火)、第一回横浜歌人会文学散歩及び即詠歌会が開催された。当日は晴れ曇りそして時々雨という天候だったが、三十八名が参加。ゲストに七月三十一日(日)の研究会のパネラーの一人でもある川柳作家の二宮茂男さんが特別参加。

文学散歩は元町中華街駅のアメリカ山公園を振り出しに、ベリック・ホール、元町百段、カトリック山手教会聖堂、山手公園、港の見える丘公園を巡って神奈川近代文学館までのほぼ一時間半のコース。にわかガイド四名(高橋みずほ、山本登志枝、河北笑子、田代弥生)の先導で思い思いに脇道をして、多くの名歌・佳吟が生まれた。

昼食と即詠歌会は神奈川近代文学館。三十七首+一句を司会の佐波洋子さんがきびしく温かく、あざやかに捌いて時間通り四時三十分を終了した。

即詠会の批評は一回り目は席順に、続いてアトラダムに指名された第二評者が、そして最後に運営委員七名(吉野裕之、角宮悦子、山本登志枝、平野久美子、高橋みずほ、間ルリ、長野義和)による講評と、一首につき三度の批評が行われた。加えて司会の佐波洋子さん(運営委員)と不肖千々和久幸がトドメの(?)総評するという濃厚サービス。これほどスリリングで濃密な歌会は、滅多に経験することがないだろう。

ちなみに二宮茂男さんの句、「うわついたことばを試すてんき雨」には、歌人一同この日のわが身を言い当てられた思いで肅然となったことだった。お陰で愉しく、濃密な会を持つことが出来た。

文学散歩・即詠歌会の概要

運営委員 間ルリ

二〇一一年四月一九日、第一回横浜歌人会文学散歩・即詠歌会が催された。朝から小雨の混じる中、元町中華街駅の集合場所約十人ごとのグループにわかれ、アメリカ山公園↓ベリック・ホール↓元町百段↓カトリック山手教会聖堂↓山手公園↓テニス発祥の地↓港の見える丘公園と散策した。十一時すぎには全員が神奈川近代文学館に戻り、昼食のお弁当を楽しんだ。

午後一時には佐波洋子さんの司会で歌会となり、三十八名の詠草について活発に意見がかわされた。

うわついたことばを試すてんき雨 二宮茂男

二宮さんは短歌以外の分野のゲストとして参加された。これは今回の吟行会の特徴であり、とても成果があった。語彙の豊富さの真剣勝負をはぐらかすようなてんき雨を、さらりと表現されて参加者一同ニヒルな作品に脱帽した。これからも短歌以外の文筆家に幅広く新鮮な作品を提示して、同志の交流の機会としたい。

歌の傾向としてはヒマラヤスギと外人墓地の歌が多く、事前に山手を訪れて何首か作品を作っておいた方もあったようで、歌人の真面目さが垣間見られた。横浜歌人会としては初めての吟行会で、事務局の長野と間は手探りの状態であった。散策もみなさんの知らない山手を紹介しようと思いを絞り研究した。今回は天候には恵まれなかったがまずまず成功したのではないかと感じる。これからも横浜歌人会の吟行会で横浜を言葉で表現したい。

文学散歩・即詠歌会報告

運営委員 佐波洋子

四月十九日第一回の文学散歩が行われた。初めての試みは、川柳の会から二宮茂男氏をゲストにお迎えして、楽しく新鮮で充実した会となり、印象深い一日だった。

清々しく美しいアメリカ山公園に集合し、十人位ずつのグループに分けて公園を出発。委員や土地に詳しい方の案内で外人墓地からベリック・ホール、元町百段と基本コースに沿うべく順路を進んだが、ベリック・ホールのスパニッシュスタイルの玄関や、建築学的価値のある建物の意匠など見応えがあり、時を忘れた。

居留地時代の洋館の並ぶ坂道は横浜の開港後のよき歴史と香りを残す所で、石畳の凹凸や大きなヒマラヤ杉も時間の重みを感じさせつつ現代に溶け込んでいる。しきりに鳴く四十雀の声が木々の静けさによく徹り、小雨模様の空から時折射す陽にあけぼの杉が透けて美しく聳え、そのひとつひとつが新鮮な景として映った。

代官坂、汐汲坂を過ぎながらカトリック山手教会聖堂まで行くと時間切れとなり、神奈川近代文学館へ戻り昼食。その間、皆いつの間にか歌を作り、昼食時に、予め配られた短冊形の紙に清書して提出。それを紙に貼ってコピーし、手早く三十八名の詠草が出来上がった。

即詠会らしく気張らず臨場感のある、多彩な作品が並ぶ。一首に最低二人は批評するという形で楽しく濃密な時間が過ぎた。

詠草―第一回横浜歌人会文学散歩・即詠歌会

- 1 こんには有難ういつかさやうなら港の見える丘を吹く風 角宮悦子
- 2 整備され花に飾られし公園に先住顔の猫たちを  
らす 高橋庚子
- 3 さみどりのサンルームに独りベリック夫人この海を見しか故園を想ひて 野一色容子
- 4 バラの芽を青年成分と名づけ君はノートにひっそりと置く 吉野裕之
- 5 はな散りて葉と若芽のみづみづし「芸亭の桜」  
枝ひろげたり 長谷川静江
- 6 いく筋か白き煙の流れゆくベイブリッジの上薄曇り 千々和久幸
- 7 青銅の美しき尖塔ながめつつ鐘の音をまつアケボノ杉の下 小川俊子
- 8 眼前に広がる海の穏やかさこの海もいつ怒るやも知れず 伊藤美枝
- 9 代官坂上がれば山手本通りベリックホールへ異国か此処は 清水八千代
- 10 まつすぐに曙杉ありどつしりとヒマラヤ杉ある  
フェリス女学院 藤田絹子
- 11 望郷の念を抱きて眠りいむ外人墓地を静寂統べ  
おり 朝井恭子
- 12 異人館に四月の薔薇は佇めり色香を秘めて棘を  
ひそめて 山本登志枝
- 13 うす暗き聖堂に祈る人のありステンドグラスに  
ぶくひかりて 葉山昌子
- 14 むらさきのクリスマス・ローズ咲きいたり卯月  
雨降る外人墓地に 長野道子
- 15 春落葉掃き寄せらるる墓地の隅ポルトガル語の  
墓碑のかたわら 俵屋晴子
- 16 インドより種運ばれしヒマラヤスギ背のびして  
いる故郷を見んと 間 ルリ
- 17 葉桜の外人墓地のかたほとり「愛されし妻しげ  
の」と刻む 渡辺礼比子
- 18 重なる線の織りなすアラベスク、ベイブリッ  
ジに雨雲の流る 後藤恵市
- 19 小鳥らの豪華なサロンかはつなつのヒマラヤ杉  
の懐深し 小林 勝
- 20 時ならぬ水雨身に凍むる「霧笛橋」白梅ほのぼ  
の咲くが遠見ゆ 山中登久子
- 21 桜田門そこが死に場所と知らぬ日の顔にて海を  
見てゐる像は 荻谷君代
- 22 足早にチェロを背負へる乙女子が貝殻坂を下り  
ゆきたり 中川暁子
- 23 「このあたり彼とよく来たの」君の見るフラン  
ス山にさ緑もえて 長野義和
- 24 うわついたことばを試すてんき雨 二宮茂男
- 25 死者の名も共に記されし階級も細かき楓の花を  
受けおり 平野久美子
- 26 春落葉足裏にやさし地震続く非日常を外人墓地  
に 河北笑子
- 27 停電の心配もなく小雨降る山手の稜線穏しく歩  
む 田谷幸子
- 28 咲くまでに時を要さむ雨あとの若葉つやめく公  
園の薔薇 土屋美代子
- 29 散策もここでおしまひ通り雨すぎたる丘に陽は  
てりかける 早島和子
- 30 散りはてし染井吉野の梢よりなお高しカトリッ  
ク教会尖塔 野崎美智子



フランス山、ペーリック・ホール、カトリック山手教会、フェリス女学院、山手外国人墓地などなど、横浜らしい作品がたくさん提出されました。

31 傘さしてあるく人の歩の中に温もりを踏みしめてゆく  
高橋みずほ

32 ヒマラヤ杉雨後をそびゆる洋館の庭に小鳥の声透りたり  
佐波洋子

33 ペーリック氏にも言ひかけてみるやうに書斎机のかたはらに立つ  
大沢優子

34 雨もよりの道をのぼりて来ればここ見尻坂とぞなるほどなるほど  
小野政男

35 シーベルトの数値など今日は忘れよう雨後のエリカはつゆふふみ咲く  
田代弥生

36 住む人のあるとも見えぬ異人館に石楠花ひとと緋色に立てる  
佐々木千枝子

37 異国なる心に歩く山手<sup>あ</sup>辺り芽吹くみどりに染まり連なる  
塚田キヌエ

38 衣摺れのおと今に聴くやうな異人館のおとやうやく開けて  
神谷由希

### 憧れを満たしてくれた一日

●文学散歩・即詠歌会に参加して 山本登志枝

横浜歌人会での初めての試みである山手界隈での文学散歩、即詠歌会とても楽しみに参加しました。

途中少し小雨が降ってきましたがすぐに、雨傘を日傘がわりとして散策は和やかに続けました。

何回もきているこの界隈ですが、歌人会の仲間といっしょに歩く楽しさは格別でした。

外人墓地の墓碑銘を読んだり、ペーリック・ホールの家の中に入って、子供部屋や執務室、ダンスをしたホールを見学し、カトリック山手教会聖堂の礼拝堂で清らかなひと時を過ごしたりしたのは、樺の小花が散る道を近代文学館へ行き、それぞれが苦吟した作品を持ち寄り即詠歌会が始まりました。

春の一日の同じ時間と、木々の芽吹き美しい山手界隈という同じ空間から生まれた作品、どの作品も、あの庭に咲いていたエリカ、あの学校に聳えていたメタセコイアと目に見えてくるようで、作品の世界に共感でき、厳しく評しあいながらも、楽しい充実した歌評会だったと思います。

特別に参加してくださった二宮茂男さんの即詠はとても軽妙な作品で、お話し下さった川柳のことも興味がおおく、思いがけないすてきな収穫でした。

外人墓地より海を臨みながら、ここに眠っている人の人生に、海のかなたの故郷に思いをはせ、点にする西洋館に往時をしのび、港の風の匂う街の散策はロマンチックな憧れを満たしてくれました。

大震災の悲しみの消えないときでしたが横浜に住んでいることが誇りに見え、横浜への、詩歌への思いが深まる一日でした。

### 雨の文学散歩

●文学散歩・即詠歌会に参加して 小野政男

この日は朝からあいにくの雨もよう。しかし、主催者側の千々和久幸さんや長野義和さん、あるいは角宮悦子さんをはじめ、参加者はいずれも錚錚たる方たちで四十三人に及ぶ。各人自由に、あるいはグループで、それぞれ手帳を手にして思い思いに歩き、吟行会とか即詠に馴れた方ばかりだから、どなたも余裕綽綽。笑顔笑顔だ。十一時半頃、公園の一角にある近代文学館の会議室に集まり、即詠一首を事務方へ提出。昼食をすませて午後十二時半より歌会に移った。

好評だった作品や、話題となった作品、問題作をあげると――

こんには有難ういつかさやうなら港の見える丘を吹く風  
角宮悦子

さみどりのサンルームに独りベリック夫人この海を見しか故国を想ひて  
野一色容子

代官坂上がれば山手本通りペーリックホールへ異国か此処は  
清水八千代

異人館に四月の薔薇は佇めり色香を秘めて棘をひそめて  
山本登志枝

むらさきのクリスマス・ローズ咲きいたり卯月雨降る外人墓地に  
長野道子

葉桜の外人墓地のかたほとり「愛されし妻しげの」と刻む  
渡辺礼比子

足早にチェロを背負へる乙女子が貝殻坂を下りゆきたり  
中川暁子

ガス灯や十字架を眺めながらのぶらぶら歩きは久しぶりで、老いを忘れたひとときではあった。

二〇一一年度横浜歌人会  
総会&新春歌会報告

1月29日午後1時から、恒例の「馬車道十番館」(横浜市中区)で、二〇一一年度横浜歌人会総会と新春歌会が行われました。

総会には、委任状51名を含む100名の会員が出席し、野崎美智子さんが議長をつとめ、二〇一〇年度の事業報告と決算報告、二〇一一年度の事業計画と予算案が提案どおりすべて、承認されました。

その後、新春歌会が中川佐和子さんの司会で行われました。

また、懇親会には、ゲストとして会報第100号のインタビューでたいへんお世話になった岡部桂一郎さんの夫人・由紀子さんをお迎えしました。懇親会の最後はいつものように横浜市歌(作詞||森林太郎、作曲||南能衛)を斉唱して、楽しかった一日を締めくくりました。

二〇一一年度事業計画

- (一) 横浜歌人会新春歌会
  - ・ 開催日 1月29日(土) 午後2時
  - ・ 会場 馬車道十番館
- (二) 第1回横浜歌人会文学散歩・即詠歌会
  - ・ 開催日 4月19日(火) 午前10時
  - ・ 会場 山下公園、港の見える丘公園周辺、神奈川近代文学館
- (三) 第17回横浜歌人会研究会
  - ・ テーマ (仮) 横浜を表現する
  - ・ 開催日 7月31日(日) 午後1時
  - ・ 会場 かながわ県民センター
- (四) 横浜歌人会観月会
  - ・ 開催日 10月15日(土) 午後2時
  - ・ 会場 桜木町ワシントンホテル(東天紅)
- (五) 会報の発行
  - ・ 短歌の創作、評論の研鑽、短歌に関する情報発信、会員の情報交流の場として年三回の会報を発行します。
- (六) 横浜歌人会ホームページの運営
  - ・ 会の紹介をはじめ、会の催し等の告知・報告、会員の歌集刊行の情報提供、横浜に関連する歌人の紹介、関連団体へのリンク等を通して、情報発信・情報交流を行っていきます。
  - URL は次の通り。  
<http://yokohama-ka.web.infoseek.co.jp/>
- (七) 会議の開催
  - ・ 総会は、二〇一二年一月に開催し、運営委員会は、概ね二ヶ月に一回開催します。

詠草―横浜歌人会新年歌会

- 1 天頂に満月ありて時動き新しき年を奈良に迎える  
塩野崎宏
- 2 数年に一度まみゆる紅き月見つ思へり退廃の世を  
綿貫昭三
- 3 われよりも少し年上日本丸傘寿の朱文字マストに掲ぐ  
藤田絹子
- 4 美脚あり、さほどもなきあり とりどりの虹よぎりゆく春のキャンパス  
津金規雄
- 5 赤茶けた月の路地奥に浮き上がり溺死せしことふと思ひだす  
後藤恵市
- 6 ちまちまと日の過ぎゆけば懂るる巡遊がまた夢にいでくる  
堀部知子
- 7 ハローワークに忘れ置かれし老眼鏡冬日睨みて鈍く光れり  
田之口久司
- 8 たばこ屋は煙に巻かれ火に巻かれ看板娘のおぼろとなりぬ  
森 藍火
- 9 初日の出拝む橋の西方の山あかあかと春飛来せり(橋上にて詠む)  
林 静峰
- 10 「考える葦」でなかつた幸福に梅の花馥郁と香る  
野崎美智子
- 11 顔白く少年過ぎて夕風に青き林檎の匂ひただよふ  
河北笑子
- 12 半月の傍らにある木星はほの白くある 異性だろうか  
間 ルリ
- 13 それぞれの犬を連れたる六人が樟の木蔭にて談笑しをり  
中村規子
- 14 ニュース聞きふと思ひ出す(一蓮托生) いうは古いかなつかしき語韻  
小野政男

- 15 昭和なる揺らぐ時代を生き抜きてつづまりて思  
うおもしろかりしを 片野浜子
- 16 時雨降る横浜駅に別れたり悲嘆にくるるとい  
にはあらず 千々と久幸
- 17 少年の命の色のはしきやし逆光に透くれない  
の耳 朝井恭子
- 18 子等去りてすきまといふに広びろしふたりで周  
平読みて過ごせり 野一色容子
- 19 うしろから肩を叩かれ席を得てその人の読む本  
の名を聞く 人見 忠
- 20 南天の朱実を庭を彩へどもさびし啄む鳥かげ絶  
えて 日野原典子
- 21 リフレッシュされたる顔の続くなり一月四日朝  
光の中に 関口満津子
- 22 さちこちゃんの声聞きたいと電話ありえッ!  
ブラジルからみっちゃん?その声みっちゃん!  
石田幸子
- 23 昼すぎの正月ダイヤのバスを待つ枇杷の花らし  
かすかに香る 小寺敦子
- 24 覚悟の上の計は届きたり薄ら氷のように携帯電  
話をたたむ 平野久美子
- 25 歳晩の公園に漕ぐこどもらのブランコのはてに  
冬の碧落 小島熱子
- 26 身勝手と言われればそう雨靴を欲しくなるのは  
いつも雨の日 原 昌子
- 27 遠くより見ゆる廊下の白き布妻あることのよろ  
こびとせむ 伊藤宏見
- 28 身めぐりの稿なしおへて一冊にす「死に支度」  
のひとつ終へし心地す 山中登久子
- 29 冬の日の閑もてあます人とみて鯛大根をねむこ  
ろに炊く 丸山美寿子
- 30 九条ねぎの葉先ながきが自転車にくくられて渡
- 31 る五条大橋 矢野豊子
- 32 若飾りの白紙に陽が射しまぶしきよ清らに迎う  
平成二十三年 伊藤美枝
- 33 年古りていよ滑らかなる膚 極楽寺の大さる  
すべ 井澤幸恵
- 34 核搭載艦船と豪華客船と須臾すれちがふ海のみ  
ぼろし 高尾文子
- 35 聴こえしは鐘の音のみこの除夜は港の船の霧笛  
聴えず 佐々木千枝子
- 36 巡らせる垣に山茶花赤く咲き人住まぬ家華やぎ  
てをり 半澤敏子
- 37 枯はちすサインコサインの線なして穏しき冬陽  
園の池面に 平井郁子
- 38 近江路の通りすがりに繭玉のしなふ天井こよひ  
のお宿 角宮悦子
- 39 丹念に丹念に葉を重ねる寒の日差しに冴えて  
葉ぼたん 葉山昌子
- 40 伝へ来し古き屋敷のほのぐらし池の水照りの欄  
間にゆるる 相沢一男
- 41 新水をみほとけに供へ鉢に遣りつくばひ浄め猫  
にも少し 高橋庚子
- 42 許可なしに墓建てるなとう立て札にヤンバルの  
森の緑濃きかな 長野義和
- 43 「御詠歌を唱うな」と看護士馳せ来たる歌会始  
中継室に 上木彙葉
- 44 あらたまの年のはじめに酌み交はす備前幻すが  
すがとよし 長谷川静枝
- 45 一月の木香薔薇が蔓延ばす出で入りの門まさき  
くあれと 佐波洋子
- 46 小鳥らの飲み水入れたる鉢皿の初氷割る音凜と  
して 松本嘉猷
- 47 はてしなく雪原映らす月光のそそら幻兎のダン
- 47 ス 木村千鶴子
- 48 たいらかに過ごし行かむを願いつつ初春を迎え  
たり花かおる部屋に 塚田キヌエ
- 49 むらきものこころ新たな元朝よ枯芝の上の落葉  
さへ美し 土屋美代子
- 50 湘南に黒く降りたる微粒子の正体知れぬまま年  
を越す 松井芳子
- 51 空映し青く染みたる眼底をひとつ飛機過ぐ陽に  
輝きて 中川暁子
- 52 昔のまま開ける古書店のなかに入り昔のままの  
目をして探す 山本登志枝
- 53 道端に老女が二人話し込む矢羽の鈴を鳴らして  
笑う 高橋みずほ
- 54 アカコッコのやうなる鳥に変はりたり塔の鴉も  
冬の没り日に 真鍋正男
- 55 軽やかにマーチ流るる商店街いつか歩調を合は  
せてみたり 田谷幸子
- 56 碧落のそらをそびらに枝の末梅ひらきそむ一月  
八日 早島和子
- 57 空と海その境目のにじむ朱に卯年はじめの心を  
重ぬ 中川佐和子
- 58 産土に元朝参りに行くならむ寒むしと言ひ合ふ  
こゑ過ぎゆけり 工藤こずゑ
- 59 パリ行きの夜間飛行は吾家の窓辺過ぎるを見ま  
せんか猫よ 佐久間裕子

\*横浜歌人会ホームページのご案内  
会の催し物のお知らせや報告、会員の歌集刊  
行などの情報提供など、いろいろな情報を掲  
載しています。ぜひご覧ください。  
<http://yokohama-kk.web.infoseek.co.jp/>

■文学散歩・即詠歌会点描



この作品、ステキ！



降ったり、晴れたり。歩いたり、休んだり。



のんびり、のんびり。



第十七回横浜歌人会研究会を開催

- 1・シンポジウム  
詩歌の現在―詩・俳句・川柳・短歌がめざすもの  
現在、第一線でご活躍の詩人、俳人、川柳作家をお招きし、四つの詩型の交流から詩歌の現在と目指すものを考えます。
- 2・日時  
7月31日(日)午後1時から3時30分まで  
(受付午後12時30分)
- 3・会場  
かながわ県民センター三〇一会議室  
(横浜市神奈川区鶴屋町2-24-2 横浜  
駅西口下車徒歩5分)
- 4・シンポジスト&コーディネーター  
シンポジスト  
坂井 信夫(横浜詩人会前会長)  
山本 一步(横浜俳話会会長)  
二宮 茂男(横浜文藝懇話会幹事)  
吉野 裕之(横浜歌人会副代表委員)  
コーディネーター  
千々和久幸(横浜歌人会代表委員)
- 5・規模&参加費  
定員 七十名  
参加費 千円(当日支払い。飲み物付き)
- 6・申込み  
会員の方につきましては、ご案内した往復ハガキでお申込みください。また、会員以外の方については、所属結社とお名前を記入して、FAX(045-681-4032)でお送りください。なお、横浜歌人会のホームページからもお申込みができます。

## ■開放的な横浜というイメージ

●新入会員自己紹介 嵯峨直樹

岩手の久慈という漁業の町で育った。今回の震災でも津波の被害を受けたが、不幸中の幸いでわたしの係累には人的被害はなかった。親戚は冷凍工場を営む親類は被害を被ったが、こちらは無事。

妻が横浜の出身という縁で南区に住む事になった。岩手にいたころの横浜のイメージというと、「横浜銀蠅」と「斉藤由貴」であった。高校時代、斉藤由貴の熱烈なファンだった私は、彼女が生れ育ったという横浜を聖地のように考えていた。すわなち、湘南の風、抜けるような青空、江の島、湘南の風、サーフィン、おしゃれな自転車、水着姿で遊ぶ若者たち。しかし、同時にこうも思った。「こんな光景は地方にいるから思うだけで、本当の横浜はこんなに美しくないに違いない」。地方にいるものは、ひねっているのである。

ところが、妻の妹の住んでいる平塚の海に子どもを連れていった時、目の前に繰り広げられている光景に圧倒された。そこには本当に楽しそうにビーチバレーで遊んでいる若者たちがいた。サーファーも実在していた。絵に描いたままの横浜がそこにあったのである。

私の育った三陸の海は夏でもさむく、空にはみつしりと雲がはびこっている。海水浴場の海は、岩がゴツゴツとあり、遠浅ではないので、急に深くなる。海で海水浴をする事も確かにあるが、今思うと漁場という意識が強かったのだと思う。横浜の風土には、この開放的な海の影響が少なからずある。メンタリテイも開放的な方が多い。そういった風土に飛び込みはや5年。着々と心の横浜化が進んでいるようである。

## ■様々なヨコハマ

●新入会員自己紹介 桜井健司

つい先日、金沢区の南東、海岸近くの町へ出掛ける機会がありました。繁華街を少し離れた沿岸部ですが、船宿が立ち並び道幅も狭く、昔ながらのささやかな漁港の面影を残している一角です。

横浜と聞いてまず誰でも思い浮かべるのは、「港ヨコハマ」。西欧的な港町のイメージが強くとて、ハイカラな印象があります。が、横浜は決してそういう場所ばかりではありません。官庁街から三、四十分程度で行ける場所にも、もう一つの「ヨコハマ」があることを知りました。同じ海を控えているながらも、西欧的な港町ではなく漁師町の香りの残る町、これも横浜のもう一つの顔です。更にその向こうは埋立地。工場と倉庫、物流基地が広がっています。

私は今、青葉区に住んでいます。青葉区は「丘のヨコハマ」と呼ばれています。都心へ通う人達のためのベッドタウンという機能を有する町です。戦後ほどなく開発された住宅街のすぐ隣には、鎮守の森もあります。港のイメージは全くありません。距離的、物理的にも「港ヨコハマ」へ行くには遠く、渋谷、東京へ出る方がはるかに早くて近い。そうは言っても、ここも紛れもなく横浜の一部です。

海を中心とした町、丘陵を核に形成された町。様々な異文化が混在し、一つの行政区によって括られている。とりとめもなく不思議な感じもしますが、これが横浜という土地の特徴でしょう。

歌作を始めて二十八年、横浜に住んで十八年になります。六月には、第三歌集『朝北』(砂子屋書房)も刊行されました。

よろしくお願いします。

## ■芸術が好き

●新入会員自己紹介 津金規雄

一九五三年東京生まれのB型です。「コスモス」に所属し、現在選者を務めています。

歌集は『ファープルの帽子』『時のクルーズ』(ともに終書房)の二冊、ほかに青磁社の「牧水賞の歌人たち」シリーズの第一巻『高野公彦』を編集しました。

いま住んでいる横浜市金沢区に越してきたのは一九九六年二月下旬のこと。なぜその時期を特定できるかといえば、作曲家の武満徹が亡くなり、その追悼番組をFMで聴きながら引越し荷物を片付けていたのを記憶しているからです。アパートの庭には雪が一面に降り積もっていました。

最寄り駅は京浜急行の金沢文庫です。この駅から都営浅草線乗り入れの特急電車を利用すると、五〇分ほどで東銀座につきます。以前は歌舞伎座、いまは新橋演舞場へ行くのに都合がいいというわけで、これも金沢区に引越してきた理由の一つです。

歌舞伎を専門にしているので、毎月劇場に行きます。失われた江戸時代の歌舞伎よりも、いま現在上演されている歌舞伎に、より関心を持っています。

青山学院の女子短大で歌舞伎を中心とした講座を持つようになって十数年になりますが、ほかにもNHK学園(新宿)、朝日カルチャー(横浜)などで教室を開いています。皆さん、ぜひいらして下さい——と、ここでしっかり宣伝しておきます。

短歌といい、歌舞伎といい、芸術一般が好きです。なかでも一番は音楽で、高校時代からのモーツァルトファンですが、昨年から世の流れに乗ってこのところすっかりマーラーにはまってしまうました。

## 横浜に思うこと

●横浜エッセイ 河北笑子

「横浜に思うこと」と考えると、三十五年余を住んで、さて、と思う。三十五年以上前、横浜に「みなとみらい」は存在しなかった。桜木町駅の横はたしか「東横浜貨物駅」ではなかったろうか。たぐさんの引込線のレールが並んでいて、赤錆びた枕木とレールの間には鉄道草や白詰草の白い花が風に揺れているだけの物淋しい空間であった。しかし、「今」に目を転じると、そこを起点に「みなとみらい」の超近代的な光景がひろがっている。当時の名残りを見せているのは汽車道と言われる遊歩道だけ。

日が昏れて「みなとみらい」一帯に灯がともりはじめるか、たれ時は、幻想的で、この美しい未来都市を遠望する時、私はふるさとの海の「不知火」の漁火を重ねている。思い出の中のいさり火と、宝石箱をひっくり返したような「みなとみらい」と光の量は比べるべくもないが…。

鉄道草は、横浜港から輸入された小麦が無蓋貨車に積まれ運ばれた時、小麦に交じったこまかな種が風に飛び鉄道沿線に定着し「鉄道草」と呼ばれるようになったという。又、「白詰草」はやはりヨーロッパから輸入された陶器やガラス器の詰物として乾燥した昔笹類が詰められ、その種がひろがった。今はほとんどの人が「ヒメジオン」「クローバー」として知っている草だ。すべて横浜が入口であった。

さて私は「不知火」の故里から流れながれて横浜に漂着しすでに三十五年余り、今は横浜を終の住処としてささやかな余生を送っている。東横浜貨物駅に咲いていた姫如苑や白詰草のように。

## ふるさと・横浜

●横浜エッセイ 野崎美智子

浜っ子の気質をいう言葉は「オッチョコチヨイのお人良し」とか。先祖代々横浜に生きてきた私は「そんなものかな」と思っています。武蔵国久良岐郡本牧字本郷。今の番地というと神奈川県横浜市中区本郷町、代々農民として生きてきました。旧姓、金子。横浜は気候は温暖、土地は農作に適していましたし、豊饒な海に面していました。食べるのに事欠かなかったことが、浜っ子の気質となったと思います。

では、いつ頃から字本郷に住んでいたかと聞かれると少々言葉に窮します。太平洋戦争の末期の昭和二十年五月二十九日の横浜空襲で父の本家が全焼、先祖代々が記載された位牌を失ってしまいました。又、私の曾祖母が嫁いできた折に持参した打掛（これは江戸城大奥につかえていた時用いたもの）も燃えてしまったとか。残念。そこで小高い丘にあった一族の墓地の小さな墓石を調べたところ「元禄十丁九月十八日・妙讃信女」という墓石をみつけました。これが一番ふるいものでした。もともと元禄以前には、農民は墓石を建てなかったとのことです。

一八五八年、日米修好通商条約が結ばれ、横浜が開港されると、欧米の高度の文明が潮のように流れこんでまいりました。江戸幕府の天領の方すみだつた横浜は、農漁村で、それに抵抗する文化がなかったのが幸いし欧米の文明をどんどん取り入れました。

私なども、若い頃には友人から「進取の気性に富んでいる」などといわれましたが、そのおかげだったと思います。

### ◇新会員の紹介

- ・尾崎 知子（塔）  
推薦者 千々和久幸、中川佐和子
- ・荻谷 君代（塔）  
推薦者 千々和久幸、中川佐和子
- ・長野 道子（香蘭）  
推薦者 千々和久幸、長野義和
- ・渡辺礼比子（香蘭）  
推薦者 千々和久幸、長野義和

### ◇告知板

会員の歌集・歌書をホームページや会報でご案内します。出版時に会員の方で、二〇一一年二月一日以降に出版された歌集・歌書が対象となります。対象となる方は、左記事務局宛てにご一報ください。

横浜歌人協会会報 第101号

発行日 二〇一一年七月十五日

編集人 長野 義和

発行人 千々和久幸

発行所 横浜歌人会

URL <http://yokohama-ka.web.infoseek.co.jp/>

振替口座 00200-5-77630

制作 アトリエ云 / 印刷 野崎印刷紙器株式会社

このファイルはホームページ配布のため、奥付の内容が印刷版のものとは異なります。